

文法がスピーチングに役立つのはどこまでか

岡田伸夫（関西外国語大学）

どの言語にも意味と形を結び付ける独自の決まりがあります。その決まりを文法というのですから、文法とコミュニケーションを相容れないものと考えるのは誤りです。文法の決まりには意識できるものとできないものがありますが、いずれにしてもそれらを習得しないでコミュニケーションできるはずがありません。もちろん、文法を習得するだけでコミュニケーションできるわけでもありません。文法にこだわるから話せないと言われることが時々ありますが、文法を十分に身につけていない学習者は、言いたいことをスムーズに音声形式に転換できなくてもどかしい思いをすることがよくあるでしょう。

文法とスピーチングのギャップの原因は何でしょうか。両者には顕著な違いがいくつかあります。まず、文法が静的な知識であるのに対して、スピーチングは、ほかのコミュニケーション活動同様、パフォーマンス（実践）です。また、文法知識の習得は個人的な営みですが、スピーチングは相手のある行為であり、通常、聞き手に何かを伝える（させる）という対人的な目的をもっています。

スピーチングの目的を達成するには、聞き手の視覚や聴覚、時には嗅覚や触覚に訴えることも有効でしょうし、聞き手の価値観、社会観、性格、聞き手がもっている世界の知識にある程度通じていることも重要です。

4月末にオバマ大統領が、任期中最後のホワイトハウス記者会ディナーで、ウィットに富んだ、楽しい、辛辣なジョークを連発しました。聴衆を大笑いさせ、拍手喝采を得ましたが、私には YouTube の動画を見ても（トランスクriptを読んでも）聴衆と一緒に笑うことができない箇所がたくさんありました。オバマ大統領と聴衆が共有している世界の知識が私に欠如していたことがその大きな原因だと思われます。スピーチングするには、聞き手がもっている世界の知識まで推測してコンテンツを決めなければならないということでしょう。

オバマ大統領は、一月後に広島を訪れ、第二次世界大戦の犠牲者に哀悼の意を示すスピーチをしましたが、こちらのスピーチは、トーンは抑え気味で、表情は哀悼にふさわしい深刻なものでした。目的を的確に理解し、聞き手に対する共感をもちながら TPO にふさわしい話をして初めて、自分の言いたいことを相手に伝えることができるでしょう。

文法学習は、通例、単文を対象としています。文の連鎖（談話）とか特定の聞き手を想定した指導（語用論的配慮）は十分とは言えません。スピーキングの場合には、特定の聞き手に向かってまとまりのある内容を話すので、談話構造や語用論的配慮が不可欠です。文法学習とスピーキングの間にはこの点でも大きな隔たりがあります。

雑談や儀礼的な挨拶などは別かもしれません、スピーキングは知的に非常に高度な活動です。難しいのは当然です。いいスピーチをする方法にどのようなものがあるかよくわかりませんが、私たちにできることの一つは、モデルとなるスピーカーのスピーチを分析し、自分のスピーチをそれに近づけようと努力することかもしれません。

「『英語で話す』とは、どういうことか」

鳥飼久美子（立教大学名誉教授）

英語で話したい、というのは明治以来の日本人が抱き続けてきた願望である。そしてその願望は、1970年代からは「英語を話せるような学校教育をするべきだ」という社会的な圧力ないしは流れとなり、様々な改革が実施されながら実効を上げることなく、今日に至っている。

本講演では、それほどまでに日本人が執着しながら未だ「話せない」（と多くが感じている）理由を探り、今後への提言を試みたい。